

特集

私は旅がすき

ジュネーヴの夏祭り

——文化と民族への出会い——

〈教育学教室・教授〉 永治 日出雄

パリ発の新幹線特急で久しぶりにジュネーヴへ着くと、レマン湖のほとりがさわやかであった。広大なモンブラン橋の左手には、ジュネーヴを象徴する大噴水塔が150mものしぶきをあげ、右手には『エミール』の著者を記念する小さなルソー島が眺められる。

人口約30万のジュネーヴは古く輝かしい歴史をもつだけでなく、新しい時代や世界の動きをいち早く摂取する土地とも言える。この都市でカルヴィンは宗教改革を実現し、啓蒙思想の精華ルソーやスタール夫人が育った。また、ロマン・ローラン、ガンディー、レーニンが反戦活動や革命運動を進めた土地、インドシナ戦争を終結させた国際会議が行なわれた土地でもある。

ジュネーヴ夏祭りは毎年7月上旬から始まる。演劇や展示会も企画されるが、30回あまりの演奏会が主要な行事であり、この年は「ジュネーヴにおけるインド」という統一テーマで用意された。たとえば、連日催される市庁舎中庭の野外コンサートでは、ヨーロッパ人によるクラシック演奏に交えて、インド民族音楽が披露され、最新の大ホールにおいてもスイス・ロマンド管弦楽団のコンサートとともに、インド人音楽家の曲目と演奏が組まれるわけである。

第二次大戦終結の記念日、8月15日にジュネーヴの夏祭りも最高潮に達する。ルソーの生家の脇にある古風なホテルで寛いでいると、市庁舎の付近から太鼓やラッパの響きが聞こえてきた。急いで街路に出た私は、あいついで行進する世界各国の軍楽隊、イギリス、フランス、アメリカ、ペルー、インド、ヨルダン等々の軍楽隊に出会った。

なかでも、緋色の頭布をつけ、火を吹くように奏するヨルダン軍楽隊が異様である。やがてすべての軍楽隊がトレユの丘に集結した。この丘からはカルヴィンゆかりのジュネーヴ大学と宗教改革記念碑を足下に見おろし、アルプスの連峰を遙かに望むことができる。

その夜にはレマン湖畔で花火の打ち上げが予定され、夕方からモンブラン橋の一带は数万の観衆で埋めつくされた。トrolleyや自動車の通行はすべて禁じられ、大噴水塔も朝から止まっていた。ようやく宵闇がおりた22時に花火の第一発が炸裂する。湖畔からはチャイコフスキーの組曲「くるみ割り人形」の演奏が湧き起り、旋律に合わせて上空につぎつぎと花模様が描かれた。爆音が響くたびに、ルソー島の樹林が影絵のように浮きあがる。こうして1時間あまり観客を魅了したのち、流麗な「花のワルツ」によって、湖上の壮大な絵巻もフィナーレとなった。終ってすべては暗闇に包まれる。だが、すぐに地上の照明が点ぜられ、ふたたび大噴水塔が始動して、清新な都市ジュネーヴを誇るかのように、空高くしぶきをあげ続けた。



ジュネーヴ旧市街を行進するアラブ人の軍楽隊。



第56号

平成元年9月11日発行
愛知教育大学
学園だより編集委員会

学園だより



特集

私は旅がすき



も — く — じ

巻頭言

一学生に (原田 純)..... 2

新旧学長あいさつ

学長 (将積 茂)..... 3

前学長 (丸井文男)..... 4

特集「私は旅がすき」

ジュネーヴの夏祭りー文化と民族への出会いー
(永治日出雄)..... 5

アフリカの思い出 (河村善也)..... 6

ふれあいの旅 (兒玉篤尚)..... 7

私の、私による、私のためのイギリス旅行
(稲垣さおり)..... 8

貧しきグルメの旅(食び?)雑感 (村岡眞澄)..... 9

夜行列車偏愛者 (小川知克)..... 10

寄稿

バンドンに暮らして (杉原陽子)..... 11

新任教官自己紹介(4名)..... 12

竹声(保健管理センターコーナー)..... 14

附属学校だより..... 15

総合科学だより..... 15

就職コーナー..... 16

クラブ紹介

馬術とは (馬術部)..... 18

心に残る何かを探しに! (たびくらぶ)..... 18

窓(学生部だより)

教務課 19

厚生課..... 21

学生課..... 22

学生生活

第20回愛教大祭を振り返って
(大学祭実行委員会)..... 24

編集後記..... 24